

そら似

若林 亨

パンパンに膨れ上がった六十リットルのゴミ袋が八つ、町内指定のゴミ置き場に並べられてあった。透明なので中身はすぐ分かる。雑草だった。草むしりをしたのだろう。多少小枝も混じっていた。

なんだこれはとばかりに近くに住む人たちが集まって来た。今日はゴミ収集日ではない。日曜日の朝八時。普段なら何の物音もなく、朝光弾ける中をうっすらと風が吹き抜けていくばかりのおだやかな時間帯だったが、今日はかなり物騒になっていた。

「清掃委員に連絡しなさいよ」「夜のうちに捨てに来たのね」「嫌がらせかしら」「なんだか臭うぞ。死体でも入ってるんじゃないのか」「犬か」「ネコかもしれん」「猫か……」「とにかく清掃委員を呼べ」

口々に文句が出る。

ゴミ出しに対しては厳しい地域だった。間違つて出すとバツテンシールが貼られる。

清掃委員は収集日前夜と当日の朝にチェックしなければならなかった。燃やせるゴミだけでなく、燃やせないゴミ、プラ、カン、透明ビン、茶色ビン、紙ごみと分別しているのもそのつど町内十カ所のゴミ置き場を確認して回る。めんどろな役なので手を上げる人はない。いつも抽選。当たれば半年間の辛抱だった。

清掃委員のひとり、平田がのたのたとやってきた。

「いやあ、朝から何かありましたか」

間抜けなことを言ったのでその場が凍りついた。スウェットのポケットに手を突っ込んだままあくびをしたものだからさらにまずい雰囲気になった。これを見ろとばかりにみんながゴミ袋を指さす。

「あんたねえ」とでしゃばりバアが食って掛かった。

「寝ぼけてる場合じゃないでしょ。説明しなさいよ」

そう言われても説明できるわけがない。突然現れたゴミ袋なのだ。

昨夜最終電車で帰ってきた人は気づかなかつたという。今朝ジョギング中の人が見つけた。その間のしわざだ。

「仕方ないわね」

でしゃばりバアが平田に目を向けた。

「なにか」

平田はとぼけた顔で聞き返した。

「ここに置いておくわけにはいかないわよね」

鷹の目になっている。

「分かっていますよ」

「分かっていたらどうするの」

「こういう時は自治会館に一時保管ということで」
「だめ。自治会館が臭くなる」
「いえ、たしか規則では……」
言いかけてやばいと思った。たしか規則では清掃委員が責任を持って対処することになっている。
「清掃委員を代表してあんたが持ち帰りなさい」

秋の虫が鳴いている。
遠くで鳴いていると思っただけで鳴いていた。

「ひのよーじん」
拍子木がポーン、ポーン。
「ひのよーじん」
ポーン、ポーン。

平田は耳をすました。防犯委員のパトロールだとは思ったが、気になったので部屋の窓を開けてみた。

外灯に照らされた場所だけが中途半端に明るい。闇の中にオレンジ色のぼかしを入れたようだ。普段は何も感じないのにこの日に限って薄気味悪く感じた。

時計を見ると二時前だった。こんな深夜にパトロールはないだろう。それに町内の火の用心は拡声器を使って「火元の確認をお願いします」「今一度火元の確認をお願いします」と呼びかけるのだ。拍子木は使わない。

聞こえてくる声も微妙だった。やや高めの男の声で「ひ・の・よー・じん」と切れ切れに聞こえる。一音ずつ息継ぎをしているようにいかにもわざとらしい。それに距離がつかめなかった。録音したテープレコーダーを振り回しているのだろうか、遠くだったり近くなったりして聞こえてくる。

さらに確かめようと思って窓から体を乗り出したところ、声は「ひ・の」で止まった。そのあとの拍子木はない。

しばらくしても続きがないので背を向けると「よー・じん」と声がした。

平田はまた外を見た。オレンジ色のぼかしが大きく広がっているように思えた。

何かが襲いかかってくるような不気味な予感がしてとっさに窓を閉めようとすると、それをとがめるかのようにまた「ひ・の」と声がした。

背を向けると「よー・じん」。
外をのぞいたら「ひ・の」。
「よー・じん」
「ひ・の」
「よー・じん」
「ひ・の」

外灯のひとつが切れかかっている。平田の部屋の窓からは見えにくいところで不規則なまばたきを繰り返していた。

火の用心のことはさっそく話題となった。何人もの住人が聞いていた。声の男はかなりの範囲を歩いていったようだ。

こういうことがあるとすぐに回覧板が回って自治会館で話し合いがもたれる。

誰かの声に似ているというのが一致した意見だった。聞いたことのある声だと噂し合った。噂しながら男たちは自分の声を確認していた。俺とは違うよなど。

でしゃばりバアが叫んだ。

「ひとりずつ火の用心って言ってみなさいよ」

仕方ないなあとばかりにまず自治会長が「火の用心」とつぶやいた。

「違うでしょ」

すかさず突っ込みが入る。

「もつとゆっくり。ひと声ひと声はつきりと」

「ひ・の・よ・お・じ・ん」

「そうそうその調子」

「でもワシみたいな年寄りの声じゃなかったぞ」

自治会長は自信ありげに言う。

でしゃばりバアは隣の男を指さした。

「ひ・の・よ・う・じ・ん」

「次！」

「ひの・よう・じん」

「次！」

「ひの・よよー・じん」「ひのよ・じん」

平田の番が回ってきた。

「ひ・の・よー・じん」

でしゃばりバアの顔が曇った。それで妙な間が開いてしまった。

みんなが平田の「ひ・の・よー・じん」を鑑定している。

顔を曇らせたまま、でしゃばりバアが「もう一度」と促した。

「ひ・の・よー・じん」

平田だけが二回言わされた。

しかし何も分からなかった。

真夜中の「ひ・の・よー・じん」も一回だけで終わった。

町内にまた空家が増えた。ひとり暮らしをしていた九十歳の女性が老健施設へ入所したのだ。

治安が悪いということでこれまで何度も空き家対策は話し合われてきたが、所有者の分からない家が多くてお手上げの状態だった。中には雨が降るたびに壁が崩れていく家もあった。どこが玄関なのか分からないほど壊れた家もあった。路地は特に心配だった。いつ瓦礫が飛んでくるか分からないし、火事にでもなったら延焼間違いなし。近所の悪ガキたちが探検家気取りで踏み込んでくるものだからさらに荒れる。たばこの吸い殻もある。コンドームも落ちている。

そんな空家の一軒にある日突然『売地』の看板が立った。

『即売希望』

連絡先の電話番号も書かれてある。

二十坪ほどの土地に小さな平屋が建っていた。壁も窓ガラスもなく、畳もはがされてい地面が丸見えになっている。柱だけの寒々しい姿。空家の中でも要注意の建物だった。

さあどうしようかと話し合うより先に、でしゃばりバアが声を上げた。

「町内の予算で買ったらどうかしら。すつきりするわよ。買っちゃいなさいよ。買うべきよ」

会計担当の副会長宅へ飛び込んで行ったときはそんな威勢のいいことを言っていたが、無理だと分かるとすぐさまお金持ちの家へ行って「あんたが買いなさいよ」とごり押しした。

「これはまたいきなりですなあ」

お金持ちは着物がよく似合っていた。板間を摺り足で歩く姿は大店の旦那そのものだったし、欄間を背に仁王立ちするとますます時代劇の大商人っぽくなった。腹の出っ張った具合も丁度いい。

「あんたの出番よ。あんたにもってこいの仕事よ」

でしゃばりバアの強引さに慌てないところもお金持ちらしい。すぐに電話して買いなさいといくら催促されても動くわけがない。

結局自治会長が電話することになった。ひよっとしたら空家が一軒減ることになるかもしれないという期待のもと、副会長三人と防犯委員、お金持ち、それから多くの住人が自治会館に集まった。

平田の姿もあった。来る前に空家の看板を見てきた。『即売希望』という文字よりも連絡先の方が大きく書かれてあった。それがわざとらしくて芝居の小道具みたいだった。白地の部分はかなり汚れている。使い回しをしているのだろう。

だがそんなことを口にする雰囲気ではない。みんな真剣そのものだ。

いつのまにか円陣が出来ていた。自治会長がちらっと柱時計に目をやって「それでは」と告げる。

博打するんじゃないんだぞ。手術始めるんじゃないんだぞ。

平田は心の中で突っ込みを入れた。

とても静かになった。みんながひとつのことに集中するとこんなにも静かになるものな

のだ。

しかし電話はつながらなかった。何度かけ直してもつながらない。長く呼び出しを続けてもつながらない。

あきらめモードが漂い始めたその時、

ツルルルル……

ツルルルル……

どこかで着信音が鳴り響いた。

全員が目を見開いた。

だれだ、だれだ、だれだ。

着信音はエコーがかかって自治会館の中を跳ね回る。そうすると余計にどこで鳴っているのか分からなくなる。

だれなんだよ、早く出るよ。

みんなそう思いながらもまずは自分の潔白を確かめるためにポケットから自分のスマホを取り出して鳴ってないことを確認する。

それにしてもタイミングが悪すぎた。自治会長が『即売希望』の連絡先へ電話をかけている真っ最中だ。

ツルルルル……

ツルルルル……

やがて音の出どころがはっきりした。

みんなの視線が平田の顔に集まる。

かばんの中から取り出されたスマホは非常ベルのようにけたたましい音を立てながら、ラッタッタラッタッタと雰囲気を楽しんでいるようでもあった。

平田は自分のスマホを思い切り強く耳に当てた。

「おまえなあ。こんな時に電話かけてくるなよ。タイミングが悪すぎるんだよ。え？ 何がって？ 今ちよつと町内の寄り合いやっててややこしいところなんだよ。とりあえず切るぞ。かけ直してくるなよ。疑われるだけだから絶対かけ直してくるなよ」

翌日またざわついた。

『即売希望』の看板が『成約済』に書き替えられていたのだ。看板全体を白く塗りつぶした上に赤のスペーサーで『成約済』と吹きつけられていた。下手くそな字だった。間近で見るとかえって読みづらい。

夜中にこっそりやってきて看板を塗り替えている。手の込んだいたずらだ。しかも目立たない路地の奥でこんなことをしている。気付かれない可能性だってある。

再び近くの人たちが集まって来た

でしゃばりバアが口火を切った。

「これは見事な犯罪です。この町内は呪われています。お祓いをしましょう。氏神委員起立！

起立願います」

髪の毛が逆立っている。

「もちろん警察にも通報します。よろしいですね」

自治会長もうなずきかなかった。

さらにでしゃばりバアは上目づかいにみんなの顔を見回して、

「この町内に恨みのある者のしわざです。最近のトラブルを洗い直すこと」と力を込めた。

でしゃばりバアはなんでも知っている。自分自身は十年ほど前に引越してきた新参者だったが、リサーチ力に長けていてあつという間に物知りとなった。主婦たちのなじみのスーパーや行きつけの美容院。子供たちの得意科目や習い事。飼われているペットの名前やペットフードの種類。各戸の間取り、リフォーム回数、自家用車のナンバー。さらには年に一度しか来ない植木職人の顔まで憶えているのだ。

ひとまず防犯強化することになった。見回り、声掛け、防犯ライトの推進、通行人チェック、深夜外出時の事前申告、緊急連絡網の再確認など。いつもは町内のことに無関心だった人たちも不気味さを共有して妙な一体感が生まれていた。

一週間後のことだった。

明け方に猫の鳴き声が聞こえた。多くの住人が同時に聞いていた。一匹ではない。競い合うような威嚇し合うような聞き苦しい鳴き声だった。

でしゃばりバアによると町内で猫を飼っているのは一軒だけ。名前はチーちゃん。雌の十五歳。おばあちゃん猫だ。室内で飼われているので外へ出ることはない。鳴き声もほとんど聞かれない。飼い主は子供のいない中年夫婦で長年家族同様に暮らしているという。

今回の鳴き声とは無関係だと分かった。

パトロールを始めるまでもなく声の主は判明した。

ICレコーダーだった。ICレコーダーに猫の鳴き声を録音してスピーカーを通して流していたのだ。自治会館の屋根に冷蔵庫ほどのスピーカーを寝かせて猫の鳴き声を流していた。壁に沿って脚立がかけられていた。

「猫なで声の人が犯人です」

でしゃばりバアは冗談のつもりで言っている。でも誰も笑わない。

「実に手が込んでますなあ」

自治会長のつぶやきには笑ってうなずく人がいた。平田が一番反応した。スピーカーをかついで脚立を登り、セッティングを終えて脚立を降りる。想像しただけでおかしい。ご苦労さんと声をかけたくなる。

ご苦労さんです。

声に出かかって止めたものだから含み笑いが肩を揺らせる。

不気味さは募っているのだが今のところ実害はない。約束違反のゴミ捨て、一晩だけの火の用心、売地成約の看板、録音された猫の鳴き声。かわいらしいいたずらで済まされる

程度だ。それがかえって住人の結束を固めることにもなっている。

「どうですか。今晚あたり一杯」

だれかが人差し指と親指でお猪口を傾ける仕草をした。するととたんに雰囲気は崩れた。「よろしいなあ」「気が利きますなあ」

まずは男たちが賛同する。

「あたしもいいかしら」「お邪魔かしら」「呼ばれなくても行くわよ」
女たちも次々と手を上げる。

邪気払いの飲み会は即決。行事のあとによく利用しているいつもの居酒屋で。

全員が賛成したわけではなかった。蚊帳の外に置かれた者もいた。

「あんたたちふざけないでよ」

でしゃばりバアがめいっぱいの悲鳴を上げた。

「町内の一大事だというのにどうかと思います」

自治会長も苦言を呈した。

「好きになさるがいい」

お金持ちは知らぬふり。

それでも邪気払いは行われた。町内の不気味な出来事はまったく話題にならず、たわいもない世間話で盛り上がった。

猫の声の一件はほとんどしゃれ扱いとなった。スピーカーはまだ新しく使い道もあるということまで自治会館に保管されることになった。ICレコーダーは処分された。

次は何が起きるんだろう。住人にはそんな期待感すら漂っていた。

「退屈ですね」「物足りませんね」

口には出さないがみんな次のニュースを待っていた。何も起こらないと損した気分になる。

だいぶ日の暮れが早くなっていた。五時を回ると薄暗くなり、六時前にはもうすっかり夜になる。

町内には車がすれ違えるほどの道が一本だけあってみんなの通学路と通勤路になっていた。毎朝同じ時間に同じ光景が見られる。わざわざ見守り役をつけなくても小学生の集団登校には通勤の大人たちが一緒に歩いていたり、下校時刻には植木の手入れや犬の散歩をする人が必ず顔を見せて声をかけていた。安心の通学路だとみんな思っていた。

この日も公園に夕暮れがやって来た。自転車置き場から翳り始めた。まだブランコは揺れている。立ち漕ぎするのは女の子。雲梯によじのぼっているのも女の子。声を出して笑っているのも女の子。男の子たちはベンチに座ってゲームに熱中している。

まもなく公園の半分が暮れた。それを合図にひとりまたひとりと帰って行く。直接呼びに来る親もいた。近所の子も連れて帰る。これもいつもの風景だ。

だれもいなくなったことを外灯の明かりが確認していた。冷えた空気も確認していた。

小学校五年生と二年生の姉妹がまだ家に戻っていない。

そのことを触れ回ったのはやはりでしゃばりバアだった。自治会長宅へ駆け込み、「誘拐よ、誘拐」と大声を上げて食事中の自治会長を外へ引きずり出した。

二十時を少し回っていた。

「まだ家に帰ってないんですってね、あの子たち」

「は？ うげっ」

自治会長は晩酌のビールをゲップしてしまった。

「みんなと一緒に公園で遊んでいたのにいつのまにかいなくなったのよ」

「あ、そうですか。それは……うげっ」

さすがに二度続けてはまなかった。でしゃばりバアにスイッチが入った。

「あんなねえ。あたしに向かってゲップなの」

首が太くなる。声が高くなる。目がつり上がる。髪の毛が逆立つ。半身になる。

「あたしに向かってゲップなのって言ってるのよ」

ここで対応を間違えるとさらに炎上させてしまう。ほうっておくのが一番だ。ほうっておいたら次から次へと話題を変えて自己満足の世界に入っていく。もちろん自治会長も承知している。

行方不明の姉妹はいつも通り学校が終わってから公園へやって来た。友達の輪に入っておしゃべりをしたり遊具で遊んだりしていたが、いつのまにかいなくなっていた。みんな帰る時は「バイバイ」と声を掛け合うのだが、今日に限ってだれも姉妹の「バイバイ」を聞いてない。それを變だと思ふこともなく、夕暮れに合わせて家へ帰った。そして姉妹の両親が心配し出したのだ。

「警察よ、警察。事件よ、事件。大変だわ、大変」

でしゃばりバアは心配しているようでもあり、楽しんでるようでもある。

警察は動いてくれた。服装や髪形、姉妹が立ち寄りそうなところなどを聞いて手配してくれた。

町内の動きも早かった。二人一組となって姉妹の名前を呼びながら探すことになった。

車からも探した。人目に付きにくい脇道などをパッシングしながらゆっくり進む。

自治会館が連絡本部となった。自治会長とでしゃばりバアとお金持ちと姉妹の両親が待機。両親は自分たちも探しに行きたいと言ったが、どこへでもすぐに動けるこの自治会館にいるのがいいと説得させられた。

「ここにふらっと戻ってくるかもよ」

でしゃばりバアのひと言は天の声だ。

なんで迷子の子が自治会館に戻ってくるんだよ。自宅に決まってるじゃないか。

だれも突っ込まない。でしゃばりバアの予言が当たることもある。そう思った方が気が楽だった。

しかし時間だけが過ぎていった。秋の夜のひんやりとした空気が焦りを募らせた。

「ねえ、聞いてくれる。この前見たのよ。二人乗りのバイクがジグザグに走っててね。危ないなあと思つたら後ろの子がスプレー振り回して何か字を書いているのよ。空に向かつて字を書いているのよ。書けるわけじゃないじゃない。でもね、じっくり見てたら分かったの。一応字になつてるのよ。ねえ、なんて書いてたと思う？ 分かる？ 分かる？ 分かる？ ははははは、ブスって書いてるのよ。ははははは、ブスだつて。だれのことかしら」

「それからね、この前見たのよ。スーパーの万引き。おばさんよ、おばさん。ふらふら歩いてるからおかしいと思つたの。それでちよつと見張つてたら棚からボールペンやら消しゴムやらゼムピンなんかを次から次へと自分のかばんの中へ入れていくのよ。どんどん入れてそのまま店を出て行こうとするから捕まえてやったの。あたしって妙に正義感の強いところがあるでしょう。それで店員に突き出そうとしたらその女なんて言ったと思う。ねえ、なんて言ったと思う。ねえねえねえ」

でしゃばりバアはくだらない話を続けていたが、それでも間が持った。

十一時を回った。姉妹がいなくなつたと分かつてから三時間が過ぎていた。

だれかが不意に缶ビールを開ける。ぷすつという音が自治会館に響き渡る。

おいおいこんな時にビールかよ。

その時だった。自治会館の入り口が黄色と赤のブラウスで明るくなった。

によーつとふたりが現れたのだ。

こんばんは、とでもいうようにふたりは普通に並んでこちらを眺めている。

それがあまりに自然な姿だったので一瞬だれも気づかなかつた。他の子が様子を見に来たのだと勘違いさせられた。

「あら」

でしゃばりバアの声も自然だった。そのブラウス似合ってるわねといった感じだ。

全員が気づいた後も大げさに無事を喜び合うことはなかつた。なんだそこにいたのかと。ただ両親だけは舞い上がっていた。許さんぞとばかりに前のめりになっている。それでも姉妹は実に冷静だった。どこへ行ってたんだと怒鳴られても「うくん、きもだめし」と答えるし、心配してたのよと言われても「ああ、ごめんごめん」と他人事のように謝っている。

「それにしてもよく自治会館へ戻つて来たなあ」

いつのまにか顔を見せていた平田が感心して言った。でしゃばりバアの言った通りだ。

「だつて。パパとママはいつもけんかしてるから家に帰つてもおもしろくないもん」

妹の方が真顔で答える。

だれかが笑い飛ばさないといけない場面だった。凍り付く寸前だ。

「あんたたちずっとふたりでいたの」

でしゃばりバアがさりげなく尋ねた。

「おじさんと一緒だった」

「おじさんってだれ」

「うん」

姉妹は入り口に突っ立ったまま集まっている大人たちを見回して再び「うん」と首をかしげた。

姉妹の話によると、暗くなってきたのでいつも通り公園を出て家へ帰ろうとしたのだけれどなんとなく家と反対の方向に歩き出し、しばらくしたところでおじさんに声をかけられたのだという。

「一緒に犯人を捕まえよう」

どこかで聞いた声だったので安心した。男は帽子をかぶって眼鏡をかけて首にタオルを巻いていたが、知っているような知らないような感じがした。それでますます安心した。知ってる人がふざけて変装しているのだと思った。一緒に歩き始めると男の歩き方にも見覚えがあった。それに家に帰ってもおもしろくないし。

姉はたんたんとしゃべった。その間妹の方は集まっている大人たちを何度も見回し、次第に真ん中あたりに座っているひとりの男を気にするようになった。

でしゃばりバアがようやくふたりを自治会館の中へ引き入れた。

ふたりは行儀よく並んで座ったが、妹の方はひとりの男が気になって仕方ない様子で、しきりに姉の肩をついている。

「それでそのおじさんと何したのよ」

でしゃばりバアがなおも尋ねた。

「歩いてただけ」

「どこを歩いてたの」

「駅の方とか山の方とか」

「本当に歩いてただけなの？」

「うん。火の用心とか看板とか猫の話しながら歩いてた」

ここでとうとう妹が指さした。

「お姉ちゃん、あの人……」

平田の怒りは収まらなかったようだ。自治会館を燃やしてやろうかと思っている。

どうして俺が犯人扱いされなきゃならないんだ、どうしてみんなの前で変装させられなきゃならないんだとつぶやいている。

妹の方から指さされた平田はその場ですぐ帽子をかぶらされ、眼鏡をかけられ、首にタオルを巻かれて姉妹の前に突き出された。

姉妹の反応がはっきりしないので今度は声を出すように言われ、自己紹介みたいなものをさせられた。その次は変装姿で自治会館の中を歩かされた。それでも姉妹は首をかしげていた。

当たり前だ。俺が何をやったというのだ。

あのでしゃばりバアは極刑だ。八つ裂きにして燃えるごみに出してやる。あんた今まで

何やってたの、アリバイはあるのってまるで犯人扱いじゃないか。俺もひとりで探し回ってたんだけ。子供らは、似てるけどやっぱり違うって言っただろう。

自治会長も極刑だ。疑いは晴れませんが何があっても何が疑いだ。いつもはバアの悪口ばかり言ってるくせに肝心な時に手のひらを返しやがって。サンドバッグにして顔の形を変えてやる。

帽子が似合いますよ。眼鏡が似合いますよ。タオルが似合いますよ。

こんなささやきが聞こえるようになった。

外出すると歩き方がぎこちなくなる。どうも行動を監視されている。前から後ろからも左右からも見張られている。走っても振りきれない。余計に視線がきつくなる。

平田のつぶやきは激しくなってきた。

いつも帽子をかぶっているような気がする。眼鏡をかけているような気がする。首にタオルを巻いているような気がする。

全部取っ払おうと道の真ん中で腕を振り回す。それは奇妙なパフォーマンスだった。

住人たちは見て見ぬふりをしていた。猫も寄ってこなかった。

ただあの姉妹だけは指さしている。

やっぱり似てる……。